

フランス文学におけるスポーツの主題

Pierre Charreton : *Les Fêtes du Corps*
— *Histoire et Tendances de la Littérature à Thème Sportif en France 1870-1970*, CIEREC, 1985.

三 好 郁 朗

前世紀末から今世紀のはじめにかけて、「スポーツ文学」ということが盛んに言われた時期がある。近代スポーツの興隆がもたらした新たな風俗、感性、イデオロギーは、文学にとってたしかに未聞の主題であった。一部の知識人から根強い反発を受けながらも、文学・芸術とスポーツの相互浸透が、今日では想像を絶するほどの規模で、しかも大いなる期待とともに遂行されたのである。ところが、スポーツが社会システムの重要な部分として、到底看過しがたい機能を果たすにいたった今日、スポーツ関係書の氾濫ということはあるにせよ、「スポーツ文学」の概念はついに有効性をもちえなかったかのようである。この百年、スポーツと文学の間で何が起り、何が起こらなかったのか。畏友ピエール・シャルトン（サンテチエンヌ大学）の仕事は、アカデミズムからほぼ完全に無視されてきたこの領域を綿密な文学史的方法で探査し、時代の感性と芸術表現の相関性を浮き彫りにしようとした初めての本格的業績である。

歴史的に言えば、いわゆる運動スポーツが文学・美術のための靈感の因となるのは、けっして新しいことでない。ホメロス、シモニデス、ピンダロス、さらにはウェルギリウスの例を見ても、古典古代の詩歌にとって運動スポーツは重要な主題の一つであった。ミュロンやポリュクレイトスの彫像をはじめ、造形芸術もまた、運動選手の肉体にヘレニズム的な美の理想を見ている。フランス文学においても、近代的な意味のスポーツではないにせよ、中世叙事詩では戦闘のかたちで、ラブレエの叙事詩では享樂のかたちで、少なくとも身体的な生の価値だけは歌い継がれていたと言える。ところが、それからの3世紀、ほぼ完全な沈黙が訪れる。フランスの詩、演劇、小説のもっとも高雅な伝統が、エネルギーとしての身体、運動能力としての身体とまったく無縁にあったのだ。

スポーツが文学・芸術の主題として復活するのは、19世紀もようやく半ばをすぎたことである。そうなるについては、身体の喜びを重視し、「健全な」肉体の回復を希求した時代の、いわば感性的、イデオロギックな変化があったことは言うまでもない（スポーツ文学の理念は、古典的文学世界の心理主義と、ロマン派から象徴派へ向かう「病的」傾向の、双方に対するアンチテーゼとしてはじまった）。同時にそれは、近代スポーツがモラルとイデオロギーを獲得し、ブルジョワ社会を支える諸制度の一つとして定着しつつあった時代でもある。その過程で近代オリンピック運動が果たした役割のことはよく知られている（クーベルタンのヒューマニズムと平和思想は、一面では、台頭する国家主義を背景に、身体訓練による民族再生の期待と結びついて普及したのだ）。それはまた、狩猟やフェンシングのような伝統的スポーツ（いわゆるデスポール）に代わって、ボート漕ぎや自転車のように大衆的なスポーツが登場した、スポーツ民主化の時代でもあった。

そうした風潮をうけて、文学者たちの中にも、自らさまざまなスポーツ体験を持つ者が出てくる。「文学者とスポーツ体験」と題された章には、その種のエピソードが数多く紹介されていて興味深い。わが国でほとんど知られることのない作家の名前が多いのは、われわれのフランス文学理解が、文学史的に聖別された大作家たちに限られてきたこと、とりわけ、時代の変化にもっとも敏感な大衆文学の類を看過してきたことを、あらためて感じさせてくれる。ジロドゥーやモンテルランの名前はともかく、スポーツを題材に優れた作品を数多く残したマルセル・プレヴォ、アンドレ・オベールなどの名すら、日本の読者には未知のままである。

シャルトンが挙げている多くのエピソードから、われわれにも馴染みのある名前をいくつか拾ってみる。たとえば、モーパッサンが熱烈な運動愛好家であったことは意外に知られていない。馬を愛し、狩りを好み、筋肉を鍛え、なにより船を漕ぐことを好んだ。友人を二人乗せ、パリからルーアンまでセーヌを漕ぎ下ったと自慢したりしている。身体訓練に対するモーパッサンの打ち込みには、文明が人間から奪い取った美への憧れと哀惜の念が潜んでいたに違いない。その彼の肉体と精神が、やがてモルヒネやコカインによって破壊され、嫌人症の闇に沈んでゆくというのは、まさに悲劇であり、運命の皮肉としか言いようがない。

デカダンスと象徴演劇の詩人メートルランクは、重量挙げとボクシングの本格的競技者であった。アラン・フルニエは『モーヌの大将』の原稿の一枚を、パリ大学ラグビー・クラブの便箋の裏面に書いている。ジロドゥーはラグビー選手であり、四百メートルの大学チャンピオンだった。ペギーは学校スポーツの神話時代を開いた人物である。サッカー選手としてのモンテルランの才能には疑問もあるが、自らアリーナに降り立ち、雄牛の角に立ち向かったことは事実らしい。カミュが、アルジェ大学のゴールキーパーとしての青春にどれほど熱い思いを抱き続けたかは、よく知られていよう。コレットが自転車レースを好んだのは、ミュージックホールの踊り子であった経歴と無関係でない。彼女には、肉体訓練と女らしさを両立させることこそ、女性のイメージを高める戦いの機会であり、手段であった。ポーボワールは逆に、テニス、スキー、徒歩行、山登り、自転車といった、当時の女性としては例外的に豊富なスポーツ体験を、かならずしも常に女性解放の戦いと結びつけていない。

自らスポーツを実践することのなかったコクトーも、失意のどん底にあったボクシング選手アル・ブラウンを励まし、導き、世界チャンピオンへ復帰させることで、スポーツ界と奇妙な関係を取り結んでいる。奇跡のカムバックがなった日、詩人はあるスポーツ紙に公開状を送り、この「精神の養子」に引退を勧めるのであった。このように、ときに異常とも不可思議とも思えるありようで、芸術・文学の世界とスポーツの世界が相互浸透を起し、それが、ことのよしあしはともかく、インテリ層に多かったスポーツ批判派を少しずつ無力にしてゆき、スポーツは再び文学に登場する権利を取り戻したのである。

近代オリンピック大会には、長く芸術部門のコンクールが含まれていた(ロンドン大会まで)。1924年のパリでは、サッカーを題材にしたジェオ・シャルルの作品に文学部門の金メダルが与えられている。ほかにも、大会を機会に数々の展覧会、芝居、音楽会の初日が続き、1924年という年には、スポーツに対する芸術・文学の側からの熱狂的称賛がピークに達した感がある。シャルトンの書誌的調査によると、スポーツを主題にした文学作品の量的なピークも、やはりこの頃にくる。1924年といえば、『シュールレアリスム宣言』が、「理性の支配をいっさい受けず、いかなる美的、道徳的先入主からも独立した思考の表現」を目指していた年である。それがまたモンテルランの『オリンピック』の年でもあったことを共時的に見通せる視点こそ、文学の機能を複合的な社会システムの一部として考えるうえで、不可欠なものである。

著者のピエール・シャルトンは、現在サンテチエンヌ大学フランス文学科助教授で、ジュール・ロマンなど、現代文学の研究者である。1981年に、本書のもとになった大部の論文で国家博士号を取得している。自身優れたスポーツマンでもあり、陸上競技やサッカーを経験したが、なかでもテニスは、50歳になる今日なおランニング・プレーヤーと聞く。その彼が、文学におけるスポーツのテーマに関心を寄せたのは、この分野の研究が皆無に近かっただけに、ごく当然の成り行きと言えよう。本書は博士論文の第一部

を改筆してなったものであり、ここで概略紹介した部分につづき、フランスにおけるスポーツ文学の主要な傾向が分類されている。文学によるスポーツの主題との取り組みは、まず、古典古代の模倣というか、一種のヘレニズム・ルネッサンスによって始まるのであるが、ついで、モラリスト的傾向、心理分析、風俗小説、リアリズム、証言の文学など、現代文学の諸傾向そのままに、多種多様な取り組みがなされてきた。それぞれの傾向を代表する作品の紹介、評価があって、これまでの文学史の欠落を埋めるものとして貴重である。なお、博士論文の第二部（未刊）は、スポーツと社会、政治、風俗等、人間関係の問題、スポーツのモラルの諸相、ならびにスポーツの美学などを考察の対象にしており、筆者の言う「総合的研究」の体系が志向されている。

*

—昨年の秋、20数年ぶりに訪れたサンテチエンヌの街並みは、明るくこざっぱりと生まれ変わっていた。主産業だった製鉄所が撤収され、空を覆う粉塵から解放されたせいだろう。シャルトン氏とは市内のノートルダム教会で待ち合わせる。シャッセリオのキリスト降架図との再会を楽しみにしていたのだが、教会の内部はすっかり改装され、シャッセリオのあった壁面には極彩色のピエタがしつらえていた。シャッセリオは、これも改装中の美術館に収められるのだという。フランスの地方都市にも変化の波は確実に打ち寄せている。シャルトン氏の案内でサンテチエンヌ大学のキャンパスを訪ねたあと、氏の住まいのあるフェルミニへ向かう。かつては鉄鋼所に働く労働者たちのベッドタウンだった町で、コルビジェの設計になる大規模集合住宅があり、日本からもときおり見学者が訪れるらしい。一夜、文学を論じ、スポーツを論じ、興余って本書を日本で翻訳出版しようという話になる。今年中にはその約束が果たせるだろうか。

(京都大学教養部助教授)